

研究活動

奥山直司

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
(著書) 1. 梵語仏典の研究IV 密教經典篇	共著	1989. 2 (平成元年2月)	平楽寺書店	本書は梵語仏典の総合的なビブリオグラフィである。奥山の執筆箇所は次の通り。 序論 II 本書における經典分類法 第1章 所作類 第3章 無上瑜伽類 第4章 雜 附篇 II Sekoddesaの梵文断片 附篇 III 中国浙江省發現の2種の梵文写本について	塚本啓祥・松長有慶・磯田照文 桜井宗信・川嶋健	569頁中 406頁
2. 東北大学西蔵学術登山隊 人文班報告 チベット・愛 茶羅の世界—その芸術・宗 教・生活—	共著	1989. 3 (平成元年3月)	小学館	1986年に東北大学西蔵学術登山隊人文班員として参加した際の知見を基に「化身の帝王権」においてダライ・ラマの本質をポタラ宮との関係において論じ、「イコンの園へ」でチベット最大の仏塔ペンコル・チョルテンの構造とシンボリズムを解説した。	編者：色川大吉 分担執筆：色川大吉 柴崎徹、山折哲雄 奥山直司、河野亮仙 岩重弘、色川大吉	168頁中95頁
3. 釈尊絵伝 [図解]	単著	1996. 4 (平成8年4月)	学習研究社	多田純規がチベットから請求した仏図タンカ・セットの特徴を分析し詳細に解説する。精密な大型複製版付き。2冊組セットで「釈尊絵伝 [図解]」(127頁)は本人がすべて執筆。「釈尊絵伝 [解説]」の本人分担部分は62頁～87頁	分担執筆：中村元 松長有慶、奈良康明 山口瑞鳳、宮治明 山折哲雄、奥山直司	127頁
4. チベット [マンダラの世界]	共著	1996. 6 (平成8年6月)	小学館	チベットの歴史・宗教・文化を「チベットの自然と人間」「ダライ・ラマとは何か」「チベット密教」「チベット興亡史」などの諸項目に分けて解説。 なお2～113頁は本人の文章と共著者松本栄一の写真がミックスされている。	分担執筆：奥山直司 ルン・トック、松本栄一	2-113頁 125-127頁
5. ムスタン 曼荼羅の旅	共著	2001. 2 (平成13年2月)	中央公論新社	ヒマラヤ最後の秘境と言われるムスタンに残るチベット仏教系の文化遺産に関する調査報告とヒマラヤ仏教紀行。共著者松井亮は写真掲載のみ。本人が文章すべてと写真キャプションを執筆。	奥山直司、松本亮	256頁
6. 評伝 河口慧海	単著	2003. 8 (平成15年8月)	中央公論新社	明治の探検僧河口慧海の思想と行動を生誕に基いて実証的に解明した評伝。		400頁
7. 河口慧海日記 ヒマラヤ・ チベットの旅	編著	2007. 5 (平成19年5月)	講談社	2004年に発見された河口慧海の第1回チベット旅行中の日記を校訂し注を付して全文掲載する(第1部)。これに「日記に基づくヒマラヤ・チベットの旅」「河口慧海の人と業績」「伯父河口慧海の想い出」の3編の解説を付す(第2部)。奥山は全体の編集と第1部、及び「日記に基づくヒマラヤ・チベットの旅」を担当した。	奥山直司、高山龍三、宮田恵美	314頁
8. 評伝 河口慧海	単著	2009. 11 (平成21年11月)	中央公論新社	同名の単行本6に加筆訂正を加えた上で文庫化したもの。		533頁
9. 高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宣法龍宛 1893-1922	共編	2010. 3 (平成22年3月)	藤原書店	高山寺蔵南方熊楠書翰の校訂テキストに注、解説、年譜などを付したもの	雲藤尊、神田英昭	370頁
(翻訳・解説) 1. D.スネルグロウヴ/H.リ ードソン『チベット文化史』		1998. 4 (平成10年4月)	春秋社	原著はチベット文化に関する世界的な名著。和訳に詳細な訳注と解説付き。		478頁
(学術論文) 1. Guhyasamāīatantra のチ ベット語訳敦煌写本	単著	1979. 12 (昭和54年12月)	『東北印度学宗教学会 論集』 6	Guhyasamāīatantraのチベット語訳 敦煌写本の存在を指摘し、その特色について考察した。		3頁
2. Guhyasamāīatantra 研究 おぼえ書	単著	1982. 3 (昭和57年3月)	『印度学仏教学研究』 30-2	Guhyasamāīatantraの梵文写本の系統を明らかにした。		2頁
3. Jyotirmāñjarīのサンスク リット写本	単著	1982. 12 (昭和57年12月)	『東北印度学宗教学会 論集』 9	Abhayākara Guptaの護摩儀軌Jyotirmāñjarīの梵文写本発見の報告		2頁
4. Abhayākara Gupta の護摩 軌Jyotirmāñjarī	単著	1983. 3 (昭和58年3月)	『印度学仏教学研究』 31-2	Jyotirmāñjarīの内容を分析し、その特色を明らかにした。		2頁
6. Jyotirmāñjarīの研究 (1)	単著	1983. 9 (昭和58年9月)	『文化』 47-1/2	Jyotirmāñjarīの梵文テキストを校訂出版した。		3頁
6. Abhayākara Gupta の護摩修 法	単著	1984. 3 (昭和59年3月)	『印度学仏教学研究』 32-2	Jyotirmāñjarīの護摩儀軌の内容を分析し、その特色を明らかにした。		3頁
7. タントラ仏教における女 神崇拜について	単著	1986. 3 (昭和61年3月)	『東北印度学宗教学会 論集』 12	Vairavāhī関係の成就法に基づいてインド密教における女神崇拜を考察。		3頁

8. Jyotirmahajariの研究(Ⅱ)	単著	1986. 12 (昭和61年12月)	『東北印度学宗教学会 論集』 13	(Ⅰ)に引き続いて梵文テキストを刊行。	18頁
9. 『河口コレクション』の 資料的価値	単著	1986. 12 (昭和61年12月)	『東北大学文学部所蔵 河口慧海請来チベット 資料図録』 佼成出版社	東北大学文学部に蔵される「河口コレクシ ョン」の資料的価値を論じた。	6頁
10. 万神の集い ーバンコル=チョンテルに 関する調査報告ー	単著	1987. 3 (昭和62年3月)	『日本西蔵学会会報』 33	中央チベット・rGyal rtseの大仏塔バン コル・チョルテンに関する報告。	6頁
11. チベット仏教バンテオン 形成に関する二つの課題	単著	1988. 3 (昭和63年3月)	『印度学仏教学研究』 36-2	チベット仏教のバンテオンが如何にして 形成されたかを2方面から考察。	7頁
12. 慧海の手紙 ー河口慧海 と19世紀末の日本そして アジアー	単著	1989. 6 (平成元年6月)	『シンポジウム・ネパ ール』15日本ネパ ール協会	河口慧海がグライ・ラマに宛てて書いた手 紙の内容分析から慧海の入蔵目的と明治仏 教界との関連を考察した。	9頁
13. 多田等観請来仏伝図タン カについて	単著	1991. 11 (平成3年11月)	『密教図像』 10	多田等観が請来した仏伝図タンカ・セット の内容とその典拠を初めて明らかにした。	16頁
14. ある聖者の伝説ーアドヴ ァヤヴァジラ伝 《Amanasikāre Yathāsūta- krama》にみられる修行者像	単著	1991. 12 (平成3年12月)	東北大学印度学講座 六十五周年記念論集 『インド思想におけ る人間観』	インド後期密教の担い手である成就者たち の実態を探るために、梵語で書かれたアド ヴァヤヴァジラ伝を翻訳・分析した。	23頁
15. 魔神信仰ーチベットにお ける「神仏習合」の一断面	単著	1991. 12 (平成3年12月)	立川武蔵編『講座仏教 の受容と変容 3 チベ ット・ネパール編』 佼成出版社	チベット仏教における魔神崇拝を文献研 究と現地調査の両面から論じた。	25頁
16. インド後期密教にお ける教理と造形 ーdevataとそのイコンを めぐってー	単著	1992. 5 (平成4年5月)	『日本仏教学会年報』 57	成就法の基本構造を明らかにし、そこにお けるイコンの機能を分析した。	14頁
17. On the Basic Structure of the Potāla Palace	単著	1992. 8 (平成4年8月)	TIBETAN STUDIES, Proceedings of the 5th Seminar of the International As- sociation of Tibetān Studies, NARITA 1989 Vol. 2, Naritāsan Shinshoji	従来よく分からなかったポタラ宮の基本 構造を明らかにするとともに、それに象 徴されるグライラマの王権の特質につ いて考察した。	8頁
18. ラサのコスモロジー ーヒマラヤ周辺地域の 都市に関する研究 (1)	単著	1993. 3 (平成5年3月)	塚本啓祥博士還暦記 念論文集『智の邂逅 ー仏教と科学』	ラサの旧観を復元し、これをマンダラ都市 都市と位置づける。	12頁
19. インド後期密教にお ける自己神化論 ーアバ ヤーカーラグプタ著『自身 加持次第のウパデーシャ』	単著	1993. 7 (平成5年7月)	宮坂宥勝博士古稀記 念論集『インド学・ 密教学論集』法蔵館	アバヤーカーラグプタの『自身加持次第の ウパデーシャ』の校訂翻訳を通じてイン ド後期密教における自身加持の行法を解 明する。	18頁
20. 仏と神のバンテオン	単著	1994. 1 (平成6年1月)	季刊『仏教』 26	チベットにおける神仏関係論的考察。	10頁
21. 敦煌莫高窟 第465 窟の壁画について (Ⅰ)	単著	1994. 12 (平成6年12月)	『密教図像』 13	敦煌莫高窟第465窟の密教壁画の解説。	9頁
22. 同 (Ⅱ)	単著	1995. 3 (平成7年3月)	『密教学研究』 27	敦煌莫高窟第465窟の密教壁画の解説。	13頁
23. 河口慧海の思想	単著	1995. 3 (平成7年3月)	『印度学仏教学研 究』 43-2	河口慧海が至りついたウパーサカ仏教の 思想を『在家仏教』から明らかにする。	5頁
24. ラサーマンダラ都市	単著	1996. 9 (平成8年9月)	立川武蔵編『マンダ ラ宇宙論』法蔵館	マンダラ都市としてのラサの構造に再考を 加える。	24頁
25. 「釈尊絵伝」絵索引(Ⅰ)	単著	1996. 9 (平成8年9月)	『高野山大学創立百 周年記念 高野山 大学論文集』	多田等観請来の仏伝図を資料として絵引 索引を作成した。	14頁
26. 同 (Ⅱ)	単著	1997. 1 (平成9年1月)	『高野山大学密教文 化研究所紀要』 第10号	多田等観請来の仏伝図を資料として 絵引索引を作成した。	14頁
27. 初期密教経典の成立に 関する一考察 ー『マハー マントラヌサーリーニ』を 中心にー	単著	1998. 3 (平成10年3月)	『平成7～9年度科 学研究費補助金 (基盤研究(B)) (2))研究成果報告 書 大乘における密 教の形成過程の研 究』(研究代表者 松長有慶)	「バンチャラクシャー」所属の経典である 『マハーマントラヌサーリーニ』の成立 と展開を、スキリングの所論を踏まえつつ 跡付け、もって初期密教成立の一端を考察 した。	14頁
28. Sādhanaśataka について	単著	1998. 3 (平成10年3月)	『印度学仏教学研究』 46-2	『成就法の花環』が『百成就法集』を改訂 増補したものであることを明らかにし、改 訂者としてAbhavākaraśūtaを想定した。	6頁
29. インド密教ホーマ儀礼	単著	1999. 5 (平成11年5月)	立川武蔵・頼富本宏 編『インド密教』	インド密教のホーマ儀礼の構造をJyo- tirmahajariを資料として明らかにすると	19頁

			(シリーズ密教1) 春秋社	ともに、インド密教におけるホーマ儀礼の発展過程を考察した。	
30. 明治二十年代後半の黄葉宗と河口慧海 — 『明教新誌』の記事を中心に—	単著	1999. 7 (平成11年7月)	『井上田了センター年報』第8号	河口慧海が明治二十年代後半に発生した黄葉宗の内紛に如何に関わったかを『明教新誌』を主たる資料として解明した。	28頁
31. 敦煌の密教美術	単著	1999. 11 (平成11年11月)	立川武蔵・頼富本宏編『中国密教』(シリーズ密教3) 春秋社	敦煌地方における密教美術の展開を通史的に明らかにした。	13頁
32. 慧海仏教学の成立	単著	1999. 12 (平成11年12月)	『河口慧海著作集』第4巻 うしお書店	河口慧海の晩年の仏教思想を『在家仏教』と『正真仏教』から明らかにする。	22頁
33. 理藏と化身 — インド後期密教の形成と展開に関する一考察—	単著	2000. 1 (平成12年1月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』別冊第2	Vairabhairavatantraのテキスト解読に基づき、インド後期密教における理藏の発想と化身思想について考察。	17頁
34. 河口慧海の思想遷歴	単著	2000. 2 (平成12年2月)	『河口慧海著作集』第3巻 うしお書房	青年時代の河口慧海の思想遷歴を堺時代から東京時代に向ける。	20頁
35. 関于多田等観撰佛伝図	単著	2000. 6 (平成12年6月)	『1994年敦煌学国際』	多田等観撰の佛伝図に関する考察(中国文)	
36. 明治二十年代前半の仏教運動と河口慧海 — 『瀧原教会雑誌』と『尊皇奉仏大同団報』の記事を中心に—	単著	2000. 12 (平成12年12月)	高木神元博士古希記念論集『仏教文化の諸相』 山喜房仏書林	明治二十年代前半の仏教運動と河口慧海との関わりを諸資料に照付ける。	17頁
37. 土宜法龍とチベット	単著	2001. 3 (平成13年3月)	『南方熊楠研究』第3	真言宗の土宜法龍がチベットに興味を抱いていた理由と世界一周旅行におけるチベット情報の収集を論ずる。	14頁
38. 慧海の手紙	単著	2001. 7 (平成13年7月)	『河口慧海著作集』別巻2 うしお書店	河口慧海がダイアグラムに宛てて書いた手紙の意味付けを再考する。	7頁
39. 明治の仏教僧によるアジア留学及び探検の研究	単著	2002. 3 (平成14年3月)	『平成12年度～13年度科学研究費補助金研究成果報告書』	明治時代にアジア各地に留学・探検を行った日本僧たちの事績を掘り起こし、その思想的、文化史的意義を考察する。	54頁
40. 日本近代仏教史の側面 — 明治の印度留学生を中心に—	単著	2003. 3 (平成15年3月)	『印度学宗教学論集』30	日本近代仏教史の形成と近代の仏教運動との関係を大乘非仏説論対策などの観点から考察する。	14頁
41. 十八会指帰校注	単著	2004. 3 (平成16年3月)	『新国訳大藏經密教部4 金剛頂経・理趣経』大蔵出版	中国・日本密教の基本典籍の一つである『十八会指帰』の国訳(書き下し)と注記・解説	
42. ランカーの八僧 — 明治二十年代前半の印度留学生の事績—	単著	2004. 6 (平成16年6月)	『仏教文化学会創立10周年・北條賢三博士古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』 山喜房仏書林	明治20年代にスリランカに留学した日本僧たちの事績を探究し、その仏教史的意義を考察する。	18頁
43. Meditation and Visual Arts in Mantra Mahayana Buddhism	単著	2004. 1 (平成16年1月)	Matrices and Weavings: Expressions of Shingon Buddhism in Japanese Culture and Society, Koyasan University	日本密教の諸尊法とインド密教の成就法を比較しながら両教における瞑想と造形美術の関係に考察を加える。	18頁
44. 土宜法龍と南方熊楠	単著	2005. 12 (平成17年12月)	松居竜五・岩崎仁編『南方熊楠の森』 方丈堂出版	真言僧土宜法龍の経歴を明らかにした上で、新出資料に基づいてロンドンにおける両者の交流の始まり前後の事情を明らかにする。	17頁
45. 呪殺の眞王たち — 『ヤマーリ・タントラ』と『ヴァジュラバイラヴァ・タントラ』—	単著	2005. 11 (平成17年11月)	松長有慶編『インド後期密教(上)』 春秋社	『ヤマーリ・タントラ』『ヴァジュラ・バイラヴァ・タントラ』とその関連文献の解説	24頁
46. 成就法の花環 — 『サーダナ・マラー』—	単著	2005. 11 (平成17年11月)	同上	『サーダナ・マラー』とその関連文献の解説	26頁
47. 仏の觸鬚が経を吐く — 『ブツダカバーラ・タントラ』—	単著	2006. 1 (平成18年1月)	松長有慶編『インド後期密教(下)』 春秋社	『ブツダカバーラ・タントラ』とその関連文献の解説	7頁
48. 男神の形をした女神 — 『マハーマーヤー・タントラ』—	単著	2006. 1 (平成18年1月)	同上	『マハーマーヤー・タントラ』とその関連文献の解説	8頁
49. 弘法大師空海論を読む	単著	2006. 12 (平成18年12月)	高野山大学叢書第5巻 現代に生きる空海	弘法大師の人間像を探究するために5つのフィクションを取り上げ分析考察する	18頁
50. 文成公主ロードを行く — 青海の寺院と遺跡	単著	2007. 3 (平成19年3月)	『平成15—18年度文部科学省科学研究補助金 基盤研究(B)・国際学術調査・研究成果報告書 西蔵自治区—青海	青海省の寺院と遺跡に関する調査報告、特に玉樹県ラッコ谷の遺物について	17頁

			省を結ぶ藏族の工芸美術と芸能の文化 その資料と保存に関する研究』		
51. Pilgrimage to the Crystal Mountain in Dolpo by the Japanese Monk, Kawaguchi E-kai	単著	2008. 3 (平成20年3月)	Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversity, Proceedings of the International Conference on Esoteric Buddhist Studies, Koyasan University, 5 Sept. - 8Sept. 2006	日記に基づく河口慧海のトルゴ通過の足跡と慧海日記が伝える19世紀末のトルボと西チベットの情報の分析。	16頁
52. 『センシオン年代記』によるセンシオン村(吾屯)の起源	単著	2008. 3 (平成20年3月)	『平成16年—19年度文部科学省科学研究補助金基礎研究(C2)・研究成果報告書 チベット仏画制作センターにおける伝統技法用法と継承に関する研究』	レブロン(青海省貴州藏族自治州同仁県)のセンシオン村の歴史についての住民の自己主張を文献と寺院壁が併用して解明し、その意味するところを明らかにする。	14頁
53. ゴマル寺の壁画	単著	2008. 3 (平成20年3月)	同上	レブロン(Gomal)のゴマル寺に残る古い壁画の分析	7頁
54. カサル村のタンカ	単著	2008. 3 (平成20年3月)	同上	レブロン(Kasal)のカサル村に残るタンカの調査報告	6頁
55. 近代日本仏教史の中の土宜法龍	単著	2008. 10 (平成20年10月)	『源』35	真言僧土宜法龍を近代日本仏教史の中に位置づける試み	18頁
56. 明治インド留学生たちが見た「比叡」と「金剛」の航海	単著	2009. 2 (平成21年2月)	『アジア文化研究所研究年報』43	「比叡」と「金剛」に便乗してイスタンブルまで行ったセイロン留学生小果丁諦と善進法彦の記録から見た両艦の航海の模様。	17頁
57. The Tibet Fever among Japanese Buddhists of the Meiji Era	単著	2009 (平成21年)	Esposito, Monica ed., Image of Tibet in the 19th and 20th Centuries. Vol. I. École française d'Extrême-Orient.	河口慧海のチベット旅行への日本社会の反響と彼の報告が日本人のチベット・イメージの形成に決定的な影響を与えた経緯、並びにその後の日本とチベットの関係史の考察。	21頁
58. 梵語・チベット語学生としての能海寛	単著	2009. 5 (平成21年5月)	『能海寛著作集』第6巻、U S S出版	能海寛が遺したノートの分析に基づいて彼がどのように梵語・チベット語を学習したかを明らかにする。なお『石峰』第15号所収の同名論文はこれのダイジェスト版。	24頁
(その他)					
1. 慧海の旅—『河口慧海請来チベット資料図録』刊行によせて—	単著	1987. 2 (昭和62年2月)	河北新報(2月12日付)	東北大学所蔵の「河コレクション」の紹介。	新聞記事
2. チベット文化(1)～(7)	単著	1987. 4 (昭和62年4月)	河北新報(4～6)	チベット文化についての紙上講座。	新聞記事
3. チベット小事典	単著	1988. 2 (昭和63年2月)	松本栄一『極限の高地・チベット世界』小学館	チベット文化百般について幅広く説明解説した。	12頁
4. 転生のひと、法王ダライ・ラマ	単著	1990. 3 (平成2年3月)	『大法輪』平成2年4月号	ダライ・ラマとはどのような存在かを論ずる。	5頁
5. 1989年の歴史学会—回顧と展望—内陸アジア(チベット)	単著	1990. 5 (平成2年5月)	『史学雑誌』99—5	1898年の内陸アジア(チベット)関係の国内の研究の回顧と展望	16頁
6. チベット語	単著	1990. 8 (平成2年8月)	『インド通信』	チベット語の紹介。	2頁
7. 田中公明著『詳解河コレクション—チベット・ネパールの仏教美術』	単著	1991. 1 (平成3年1月)	『日本ネパール協会会報』104	書評	1頁
8. デトレフ・インゴ・ラオブ著 ボン教の死者の書	単著	1994. 12 (平成6年12月)	『ユリイカ』26—13	翻訳・解説	12頁
9. 田中公明著『チベット密教』	単著	1995. 3 (平成7年3月)	『密教学研究』27	書評	4頁
10. 密教の文化	単著	1995. 11 (平成7年11月)	松長有慶編『密教を知るためのブックガイド』法蔵館	密教文化の諸相に関わるブックガイド	10頁
11. 田中公明著『インド・チベット曼荼羅の研究』	単著	1996. 12 (平成8年12月)	『東方』第12号	書評	2頁
12. 高楠順次郎と河口慧海—脱亜と入亜の仏教学	単著	1999. 8 (平成11年8月)	『大法輪』平成11年9月号	欧化された仏教学の流れとは別に「入亜の仏教学」が存在した可能性を探る。	6頁
13. 秘境ムスタン チベット	単著	1999. 8	読売新聞夕刊	ムスタンの紹介を兼ねて、仏教文化の保存	新聞記事

文化のタイムカプセル		(平成11年8月)		の必要を訴える。	
14. バドマサンバヴァ・ロードに行く	単著	2000.11 (平成12年11月)	『大法輪』 平成12年11月号	ムスタン紀行	6頁
15. いかかにして生死を越えるかー戦争と仏教ー	単著	2001.3 (平成13年3月)	『生と死』第4号	日本仏教が戦争と如何に関わってきたかの問題を考える。	11頁
16. ツルティム・ケサン、山田哲也共訳『チベットの密教ヨーガ』	単著	2001.3 (平成13年3月)	『密教学研究』33	書評	4頁
17. 菩提樹の葉陰の静けさ	単著	2001.10 (平成13年10月)	読売新聞夕刊 平成13年10月〇日	研究ノートのエッセー。	新聞記事
18. 『秘境西域八年の潜行抄』解説	単著	2001.10 (平成13年10月)	西川一三『秘境西域八年潜行抄』中公文庫	同書に対する解説。	6頁
19. 河口慧海と在家仏教運動	単著	2002.4 (平成14年4月)	『大法輪』 平成14年4月号	近代の仏教運動のシリーズの一つ。	4頁
20. 日本から世界へ 哲学館初期の学生たち	単著	2002.4 (平成14年4月)	『東洋大学井上円了 記念学術センター サティア』46	善達法彦と大宮孝潤の埋もれた事績を 発掘し、顕彰する。	3頁
21. ムスタンの荒野に咲く野生 の白バラ	単著	2002.3 (平成14年3月)	『日本ネパール協会会 報』No.171	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシ リーズ「写真語る」①	1頁
22. カグベニの眺め	単著	2002.5 (平成14年5月)	『日本ネパール協会会 報』No.172	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシ リーズ「写真語る」②	1頁
23. タシーテンジン師	単著	2002.9 (平成14年9月)	『日本ネパール協会会 報』No.174	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシ リーズ「写真語る」③	1頁
24. 『展望 河口慧海論』高 龍三・著	単著	2003.3 (平成15年3月)	『日本ネパール協会会 報』No.177	書評	1頁
25. 千山羊を抱いた少女	単著	2003.5 (平成15年5月)	『日本ネパール協会会 報』No.178	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシ リーズ「写真語る」④	1頁
26. 友だちといっしょ	単著	2003.7 (平成15年7月)	『日本ネパール協会会 報』No.179	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシ リーズ「写真語る」⑤	1頁
27. 松井亮さんの急逝を悼む	単著	2003.7 (平成15年7月)	『日本ネパール協会会 報』No.179	2003年6月にカトマンドウで急逝した松 井亮さんに対する追悼文	4分の1頁
28. 高龍三編著『展望 河 口慧海論』	単著	2003.9 (平成15年9月)	『學鏡』Vol.100 No.9	左記の書の紹介を兼ねたエッセイ	4頁
29. 河口慧海 禁食肉・禁酒 の慧海は美食家と健康家だっ た	単著	2003 10 (平成15年10月)	別冊『太陽』125「日 本の探検家たち」	河口慧海のエピソードと人となり	4頁
30. 高野山と河口慧海	単著	2004.1 (平成16年1月)	高野山時報	高野山と河口慧海との関わり	2頁
31. チベットの密教と文化	単著	2004.3 (平成16年3月)	高野山大学通信教育室	通信制大学院の教科書として執筆した チベット密教文化概説	203頁
32. 密教史概説の手引き	共著	2004.3 (平成16年3月)	高野山大学通信教育室	通信制大学院の教科書として執筆した 密教史概説(担当は第1章インド密教史 第2章チベット密教史)	武内孝善・ 佐藤正信 24頁
33. 河口慧海とはどんな人？ 河口コレクション	単著	2004.5 (平成16年5月)	『週刊朝日百科仏教を 歩く』No.28	河口慧海の生涯とその志について解説。 山折哲雄・末木文美士編『名僧たちの教 え』朝日新聞社、2005.9に再録。	6頁
34. インド国シッキム州十日 間の旅・報告その1～4	単著	2004.8-9 (平成16年8-9月)	高野山時報	シッキムの仏教概説と旅行の一部始終	12頁
35. 現代青海事情	単著	2005.1 (平成17年1月)	高野山時報	中国青海省の現代事情	2頁
36. 河口慧海の日記 克明な 記述 謎の越境ルート解明へ	単著	2005.1 (平成17年1月)	読売新聞夕刊	河口慧海の日記の発見とその意義	新聞記事
37. チベットの仏教、菩提	単著	2005.3 (平成17年3月)	三木紀人・山形孝雄編 『宗教のキーワード 集』学燈社	キーワード(菩提)解説とコラム「世界 のさまざまな宗教」(チベットの仏教) を執筆した。	4頁
38. 河口慧海の日記発見	単著	2005.4 (平成17年4月)	ナショナルジオグラフ ィック・日本版	河口慧海の日記の発見報告と予想される 旅行ルートの考察	4頁
39. 河口慧海の道を追う一日 本人初のヒマラヤ越え	単著	2006.4 (平成18年4月)	日本山岳会関西支部報 No.122	日記に基づいて河口慧海のヒマラヤ踏査 経路を探る	11頁
40. 慧海、三つの顔	単著	2007.1 (平成19年1月)	『季刊民俗学』119号	探検旅行者、学者、宗教家の3つの顔が 慧海の中でどう結びついていたか	3頁
41. 河口慧海とその時代	単著	2007.3 (平成19年3月)	『フォーラム堺学』第 13集	堺における河口慧海とそのヒマラヤ越え を中心とする第1回旅行	48頁

42. 日本仏教界の入藏熱	単著	2007.3 (平成19年3月)	『共生する世界 仏教と環境』法蔵館	明治の日本仏教界に起こった入藏熱についての解説	12頁
43. 変わりゆく世界仏教地図と真言宗徒	単著	2008.1 (平成20年1月)	『へんじょう』22	アジア各地におこっている仏教の新しい潮流とグローバル化時代の真言宗徒の役割を語る。	2頁
44. ジャガダラで発見された五祀堂聖寺院の最古の遺構	単著	2009.2 (平成21年2月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』第22号	モシアラフ・ホセイソンの英語論文の翻訳と解説	10頁
45. 河口慧海の歩いた道—ヒマラヤ・チベット・日本—	単著	2009.3 (平成21年3月)	『フォーラム學学』第15集	河口慧海の事績をチベット旅行を中心に紹介する。	43頁
46. 川喜田二郎氏を悼む	単著	2009.7 (平成21年7月)	読売新聞朝刊	川喜田二郎氏の追悼文	新聞記事
47. 南方熊楠と高野山、そして真言密教	単著	2009.10 (平成21年10月)	『熊楠Works』No.34	南方熊楠と高野山、及び真言密教の関係の考察	8頁
48. 河口慧海 志を胸にチベット入道を果たした探検僧	単著	2010.2 (平成22年2月)	『歴史読本』2月号	河口慧海の事績をチベット旅行を中心に紹介・解説する。	6頁
49. 熊楠—法龍、二十九年の交流	単著	2010.3 (平成22年3月)	『城』No.216	南方熊楠と土宣法龍の書簡を通じての交流に関する解説	4頁
50. 熊楠vs. 法龍—往復書簡研究の一面—	単著	2010.4 (平成22年4月)	『熊楠Works』No.35	根尾山高山寺発現の新資料を用いた往復書簡の紹介と新たな研究の可能性についての論及	5頁
51. 新発見の「南方熊楠書翰」刊行へ	単著	2010.5 (平成22年5月)	『中外日報』2010年5月11日	藤原書店から刊行された高山寺蔵南方熊楠書翰の特徴と意義	新聞記事
52. 南方熊楠と大乘仏教（上）真言僧・土宣法龍との交流を巡って	単著	2010.6 (平成22年6月)	『大法輪』77-6	南方熊楠の仏教に対する態度、法龍との交流と曼荼羅の学習について	8頁
53. 「日本のチベット」考	単著	2010.6 (平成22年6月)	下西忠・山口幸照・小笠原正仁編『仏教と差別 佐々木兼俊の歩んだ道』明石書店	日本独特の「○○のチベット」という差別表現の意味と由来を考察する。	17頁
54. 南方熊楠と大乘仏教（下）「熊楠の生命の樹」から「南方曼陀羅」へ	単著	2010.8 (平成22年8月)	『大法輪』77-8	南方熊楠ほどのようなプロセスを経て「南方曼陀羅」を構想するに到ったかの考察	9頁
55. 『正真仏教』解説	単著	2010.8 (平成22年8月)	河口慧海『正真仏教』慧文社	河口慧海の代表的著作である『正真仏教』の解説	6頁



所属	文学部	職名	教授	氏名	奥山直司	大学院の授業担当の有無 (有)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日	概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		2002. 5. 15 (平成14年5月15日)	ネパール・ヒマラヤで撮影したチベット仏教文化関係の写真をデジタル化し、Power Pointを用いて臨場感のある授業が展開できるようにした。これ以降、多くの授業をできるだけ自分が撮った写真を使ってヴィジュアルに分かりやすく構成するよう心掛けている。			
2. 作成した教科書、 教材、参考書		1995. 11. 20 (平成7年11月20日) 1996. 4. 8 (平成8年4月8日) 1996. 6. 10 (平成8年6月10日) 1998. 4. 27 (平成10年4月27日) 2002. 4. 20 (平成14年4月20日) 2003. 8. 10 (平成15年8月10日) 2004. 3  2004. 7 (平成16年7月) 2010. 3	「密教の文化」(『密教を知るためのブックガイド』所収) 『釈尊絵伝』(密教の文化、特に文学と芸術作品の関係) 『チベット [マンダラの国]』(チベットの歴史と文化の概説として使用) スネルグローヴ/リチャードソン共著『チベット文化史』の翻訳と解説(チベット文化史概説の教材として使用) ネパールのムスタンで撮影されたマンダラ等の写真を提供してGigaviewを用いた教材作成に協力した。 『評伝 河口慧海』中央公論新社(平成16年度より大学院で教材として使用) 『チベットの密教と文化』高野山大学通信教育室(通信制大学院の教科書) 著書『ムスタン 曼荼羅の旅』をデジコンサルティング㈱と協力してマルチメディア版DAISY図書として出版した。 奥山・雲藤・神田編『高山寺蔵 南方形楠巻軸 土宣法龍宛1893-1922』藤原書店(大学院の授業の教材として使用)			
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等						
4. その他教育活動上 特記すべき事項			毎年、高野山大学大学院に提出された修士論文の審査に主査または副査として携わっている。 同じく博士論文の審査にこれまで三回副査として携わった。			